

## 浦安鐵鋼団地の過去・現在・未来

藤澤 鐵 雄  
(藤澤鋼板株式会社)  
代表取締役社長



弊社の所在地は千葉県浦安市の浦安鐵鋼団地内であり、あの世界一のテーマパークのすぐ傍に位置している。夢の国と鉄鋼加工の工業団地は不釣り合いな感が否めないが、商工中金との深い縁もあり現在に至っている。

昭和30年代に入ったところから、急激な工業発展や京葉工業地帯の埋め立てなどにより浦安沿岸は海洋汚染が進み、漁獲量は年々減少の一途をたどっていた。そのころ千葉県では沿岸を埋め立てて企業を誘致し、農業・漁業県から工業県への脱皮を図る計画が進んでいた。昭和34年には埋め立て後の浦安における大規模遊園地の建設が既に構想されており、県は浦安沖を遊園地、住宅地そして流通業務用地として活用する一大埋め立てプロジェクトをスタートさせた。しかしながら、県と浦安漁協との交渉は困難を極め、漁業権の全面放棄の合意までには10年の歳月を要した。

高度成長期に入り自動車の増加を背景とした交通事情の悪化に対応するため、都内で大型トラックの交通規制が行われた。都内に点在していた鋼材流通業者は規制により移転を迫られ、埋め立て事業により新たな土地が造成される事となった浦安を選んだ。当時の浦安町としても水質汚染によって漁業を奪われ、主要な産業が無いなかで、ばい煙や廃液を出す事の無い工業を誘致できる事は、町の発展を考えるうえで歓迎すべき事であった。

しかしながら、埋め立て事業には巨額の資金が必要であり、進出を希望する企業とは、まだ何も存在していない土地に対して千葉県との分譲協定が締結され、土地代金の納入からのスタートとなった。既にかかなりの額の納入が進んだ昭和40年、土地購入者達は竹芝棧橋から船をチャーターし現地見学会を実施したが、海原のなか揺れる船上から見えるのは数隻の釣り船だけであったとの事であり、後に「何も見えない見学会」と称された。その時に納入窓口となった金融機関の中心が商工中金押上支店であり、現在も浦安鐵鋼会館の一角では押上支店浦安出張所が営業している。

無事に埋め立て事業も終了した昭和43年、弊社創業者である私の父は浦安鐵鋼団地第1号進出を果たし、浦安市の年表にもその事実が記されている。

当時高校生であった私も工場完成披露宴に参加したが、砂漠の様な広大な敷地にポツンと建

設された工場に唾然とした事を覚えている。ひとたび風が吹けば砂嵐の様に砂煙が舞い上がり、雨が降れば泥沼、夜になれば真っ暗闇、そんな状態の工業団地であった。

埋め立てされたばかりの土地に重量物を扱う工場の建設は、当然ながら何のデータも無く基礎工事は大変であった。弊社工場建設前の地盤調査にてN値（測定用の鉄棒の上に63.5kg程度のおもりを75cmの高さから自然落下させ、その鉄棒が30cm沈むまでに要する打撃の数をN値として表わす、数値が大きいほど締まりのある硬い地盤を示す）を計測したデータが存在するが、地下数メートル地点においてN値0の数字が沢山記録されている。つまり打撃をしなくても測定用の鉄棒が自重だけで沈んでしまっている。そのような超軟弱な地盤に工場を建設するのは至難の連続であったようだが、試行錯誤のうえ父は多額の資金が掛かるのを承知で昔からの松杭による基礎工事を採用した。

埋め立て地は当然ながら地盤沈下が激しく、一説では浦安鐵鋼団地は造成時に比べ全体的に2メートル近く沈下しているとも言われているが、この松杭工法は非常に優れており、弊社では不当沈下に悩まれた事は一度も無く、現在でも機械のリニューアル等で基礎工事を行うと、地中から全く腐食していない松杭が出土するのは驚きである。

平成23年3月11日の東日本大震災において浦安では甚大な被害が発生した。日本橋にて被災した私は深夜に帰宅できたが、翌早朝に鐵鋼団地で私が目にしたのは、まさに戦場のような荒れ果てた壮絶な光景であった。液状化で泥だらけになった道路はあちらこちらで陥没し、マンホールは見事に1メートルくらい隆起、斜めに傾いてしまった事務所等、昨日までの活気あふれる鐵鋼団地が信じられないような、目を疑いたくなる光景ばかりであった。恐る恐る弊社の工場内に入ると母材や製品の荷崩れはあるものの、工場建屋や機械設備には目立った損傷は無く事務所棟も傾いてはいなかった。後日、他社の被害状況が明らかになると、弊社の被害は非常に軽微なものであったことが判明した。工場内にある全長80メートルの生産ライン2基のセンターにもズレが生じず、クレーン設備のレールにも狂いは発生しておらず、断水したためクーラントの水確保に時間は掛かったが約1週間後には操業が再開できた。

後日、建築士の友人から「松杭工法」が功を奏したのだろうとの見解を聞き、父の墓前にて見えない部分に金を掛けてくれた事に感謝した。

当初の埋め立て計画から60年近くが経過した現在の浦安鐵鋼団地は、33万坪の土地に217社（270事業所）を擁し、4,200人の雇用を生み出している。

弊社が一番乗りを果たした当時は、建設中ではあったが地下鉄東西線も開通はしておらず、首都高湾岸線もJR京葉線もその計画さえ誰も知らなかった。進出時「陸の孤島」とも称され弊社の浦安工場勤務者には「へき地手当」が支給されていた事を思うと、テーマパークに毎日多数の方が訪れる現在と比べ隔世の感がある。

先人達の血と汗と涙の結晶であるこの鐵鋼団地を守り発展させていくのは我々の使命であり、それをこの先も継承していかなければならない。私が現在副理事長を拝命している浦安鐵鋼団地協同組合は、一枚岩の団結、まさに「鐵の結束」で繋がっており、若手経営者にて組織されている下部組織「U-ING」にも沢山のたくましい後輩達が在籍している。

長い歴史のなか、幾多の困難を乗り越え成長し進化を続けてきた浦安鐵鋼団地は、これからも自らの努力と団結により力強く前進するであろう。